

# 欧州 EU ブランド VS 日本ブランド

食に関連する予防医学と豆知識

10月1日の日本経済新聞に興味深い記事がございましたので、御紹介いたします。

『食卓を預かる主婦が食材の産地に目を凝らす。国産なら安心、中国産なら手を引く。夕刻のスーパーでよく見かける光景だ。ならば厳しい基準を満たす国産品は安全で、管理が甘い外国産は危ないのか。事はそう単純ではない。東アジア諸国連合 (ASEAN) の一角で背筋が寒くなる話を聞いた。「日本は残り物の市場。食のゴミ箱と呼ぶ人もいる」発言の主は食品加工会社の経営者。日本に冷凍エビを輸出している。「日本人自身は誤解しているようだが、日本の安全基準は国際的にみて極めて甘い」。この地元企業は、厳格に検査した品を欧州連合 (EU) と米国市場に回し、それ以外を日本に売るといふ。日本の消費者が描く「安全な国ニッポン」。アジアの目に映る日本市場の姿は、その美しい自画像とは似ても似つかない。一例を挙げよう。醤油などに含まれる 3-MCPD という化学物質がある。一部の専門家が発癌性の疑いを指摘したのを受け、真っ先に含有量の規制を打ち出したのは EU だった。日本ではまだ醤油業界が自主的に 1ppm という目安を設けているだけ。EU が法的に定めた 0.02ppm に比べて二桁もハードルが低い。アジア企業は日本だけでなく欧米にも顧客を抱える以上、厳しい EU 基準を満たす努力をするほかない。ASEAN に工場進出したものの、EU 準拠の審査に合格できずに悩む日本の食品会社がある。日本には輸出できても、欧米市場では EU 基準に鍛えられたアジア企業に歯が立たないという。笑えない話だ。マレーシアやタイは、EU の指導の下で食品安全の国内法規を厳格化し始めている。EU と同等の水準を目指す政策こそ世界で自国産品の信用を高める近道だと判断したからだ。ふと東アジアを見回せば、域内の基準制度は EU 方式が席卷している現実に気づく。食品の安全だけではない。環境基準、工業規格、会計基準でも EU の影響力は圧倒的だ。工業化を急ぐ途上国の政府や企業が一斉に EU を見習う。EU 基準のブランド化である。その結果、EU は国際標準の主導権をさらに強く握る。福田康夫首相は東アジアとの経済連携を重視すると宣言した。だが、日本の足元では EU が着々と自前のビジネスの土俵を広げつつある。日本の基準制度はアジアの同胞に見向きもされないのが現実である。スーパーの風景を見る限り、食品では国産品が信用の獲得競争に勝ったかのように見える。だが、それは日本国内だけで通用する甘い幻想ではないか』